

## 第1回離島地域観光交流促進委員会議事概要

### 【日 時】

平成19年3月15日(木) 10:00~12:00

### 【場 所】

国土交通省(合同庁舎3号館)2階特別会議室

### 【出席者】

[委員] 安島委員長、加藤委員、熊村委員、五島委員、清水委員、中岡委員  
[国土交通省] 大西審議官、安原審議官、大野審議官、重田観光地域振興課長、  
福島離島振興課長、大塚内航課長、梅山振興課長

### 【議事概要】

- 委員：最近、島を旅した際、昔の南国ブームで島で生活した若者が、今は団塊の世代となり、昔の懐かしい思いを描いて多くの人が離島を訪れていた。ロングステアを目的としている人もいた。今後、このような人達が団体ではなく個で訪れるのではないか。
- 委員：小さな島を巡るオリジナルツアーは、宿のキャパシティーや船の定員から参加人員に限られるうえ、欠航も余儀なくされることもあり、手間ばかり掛かって楽しく儲かる場所ではないが、お客様の満足度は大きい。ツアーを契機に、長期滞在される方もいる。
- 委員：最近の旅行者の特徴は、一步踏み込んだ目的を持ったお客様が増えつつある。定住は、まだ一部の人でしかないが、これをどのように引上げて行くかがテーマ。団塊の世代は観光だけではなく、趣味等を活かした収入で、生活の場として定住人口を増やす策もあるのではないか。
- 委員：離島は都会と切り離され、いろいろな面で不便さを感じるころも魅力。海を見て田畑仕事などをして自然に触れ合い何となく時間を過ごすことに満足し、そこからリピートや長期滞在に繋げていけるのではないか。空家をセカンドハウスとし活用するなど離島の特徴を生かしていければ良いのではないか。
- 委員：旅行は、滞在型、ニューツーリズム、エコツーリズムなどのテーマ型になりつつある。島の人たちが提案をしないとお客様は満足しない。交流人口の拡大で生きていくんだという認識を持つのか否かで大きく違ってくる。島の地域作りが重要、単なるインフラだけではなく、ソフト、人材についても議論すべき。航路事業者は、燃料油の高騰等で船の造り替えもままならないうえに、安定的な航路の維持がないと旅行商品にもならないので、離島航路事業者の問題も議論すべき。離島航路を利用した観光だけではなく、NPOで動きが出てきている舟運の利用も含めた離島の観光、船旅の魅力についてトータルで議論すべきではないか。
- 国土交通省：小型船を建造し、島で一番海岸線の眺めがすばらしい所を、ツアー客向けに運航したら非常に人気となった。今後は、一般客も利用していただければそれが契機となり膨らんでいくのではと思っている。離島航路維持のため、本土と島で教育旅行を相互に行おうとする話が広がっており、市が教育委員会等に教育旅行(セカンドスクール)を呼びかけ、片道運賃を助成、施設利用の無料化等を行うこととしており、今後、具体的な動きになると思う。本委

員会では単なる抽象論ではなく、対象となるマーケットを明確にして、具体的なプロジェクトについて提案、応援できるような方向で進めて頂けると有難い。

国交省：働き盛りの人の減少で高齢化してしまった島はあまり元気がない。体力が続かず静かな生活を送りたいという話を聞く。宿泊施設については、島の資本だけではなかなか投資が難しい。一方で、いわゆる外部資本が入ろうとすると反発が強いという話しも耳にするがどう対応すべきか。

委員：接客の研修の募集を行ったが、高齢化で跡継がなく今更トレーニングを受けても活かせない。実際に観光客を受け入れるための宿泊施設は非常に少ない。収容能力の少ない離島は、旅行会社が数軒の部屋を取り合うこととなり、また、代替となる同じクラスの宿が少ないので、商品を作るのが難しい。宿泊施設について、デラックスな施設である必要はないが、女性を考慮するとある程度の清潔さを保持しないとリピーターにつながらない。レベルを上げたいが、自前で行える環境にはないので、どこかで支援できないか。

委員：観光ツアーの場合は、それなりの施設や接客が必要であるが、大資本は全部囲い込んで地域と関わりをもたないケースも多いので、地域とギャップができて地元が受け入れがたいという場合もある。結果的に地域全体の受け皿がない限り上手くいかない。滞在型や地元の資源を味わってもらうグリーンツーリズム、教育旅行といった場合は、民宿、B&B、町家とか様々あるが、レベルアップしないと受け入れもできない。離島は幸い航路事業者がかなり先頭にたって観光振興をやってくれていることから、他の地域と違って高齢化でもやっていける可能性はある。交流人口で生きようとする事例を成功物語にしてほしい。完成するまで金が回らないケースもあるので、そういったところを手伝ってほしい。

委員：ツアー客の宿泊をお願いしている宿から「観光客相手はリスクが大きいので辞めたい。」と言われた。理由は、島の不便さについて事情を理解できない客が宿等を責めたり、島の小さな宿は貸し切り状態で予約を受けているので、欠航でキャンセルになった場合、客がキャンセル料を払わないと痛手となってしまいうケースもある。旅行会社もリスクが大きいのでツアーとして送客しづらい面もある。また、小さな島のツアーを企画するために宿へ連絡を入れると、逆に、「島には何も無いよ。」と言われてしまう。小さな島の観光振興はハード面もあるが、ポイントとしては島を愛し、島の良さを多くの人に知ってもらおうと思う人がどれだけいるかということではないか。

国交省：基本的には、「このままではいけないが、どうしたらいいかわからない。」というところに、「観光を視点においた、地域作りはどうですか。」と提案する方が良いのでは。その際、団塊の世代に限らず、例えばモデル的なイメージを考えて行っていくのではないか。

国交省：全国の中で数カ所でも、創意工夫のある島旅が国の何らかの支援によって打率3割でも成功すれば、情報化社会の中で広がっていくのではないか。全国一律である必要はないのではないか。

委員：港の整備等のインフラ整備について、交流という観点からアクセスの配慮など、在り方を検討すべきではないか。

委員長：今回は、長崎県五島列島における観光振興の取り組み事例の紹介及び各委員の取り組みや関心ごとについて資料に基づき発表後、議論を行う。